連載 第6回

# ささやかだけど、たしかなこと。

田中康夫

You are the Hope for Tomorrow.

## 「一億総活躍社会」を徘徊する「希望出生率」という名の妖怪

時空を超えてカール・マルクスが存命だったなら、思わず慨歎したでありましょう。「一匹の妖怪が日本を徘徊している。『希望出生率』という名の妖怪が」と。

言わずもがな、「ニッポン『一億総活躍』プラン」と銘打って放たれた「新三本の矢」。その第二の矢が「夢をつむぐ子育て支援」。「ターゲットは、希望出生率1・8を実現。50年後も、人口1億人を維持」と高らかに謳います。

「希望出生率」？ その聞き慣れぬ不可解な惹句とは一体、何ぞや！ 発信元を手繰ると岩手県知事、総務大臣を務めた増田寛也氏が座長の一民間組織「日本創成会議」でした。昨年5月に発表した「ストップ少子化・地方元気戦略」の冒頭で、「国民の『希望出生率』を実現する」と打ち出しています。

曰く、世論調査で導き出された「夫婦が予定する子供数」と「独身者が理想とする子供数」から算出した日本の「希望出生率」が1・8なのだと。然らば、「10年後の2025年を目処に『出生率＝1・8を実現すること』を基本目標」とすべきと。12年間の知事在任中に岩手県の起債残高＝借金を1兆4千億円へ倍増させた逸材ならではの、〝八卦見〟も顔負けの「非科学的」数値設定と僕の目には映ります。

人口統計上の指標として知られる「合計特殊出生率」。それは、「15～49歳までの女性の年齢別出生率を合計し、「年次比較、国際比較、地域比較に用いられている」と厚生労働省も定義する世界基準です。日本の公衆衛生を勘案すると2・07で推移した場合に人口は横ばいを保つ、と国立社会保障・人口問題研究所は推計しています。

その日本は現在1・42。女性が出産育児&職場復帰し易い社会環境を如何に整えようとも、2・07は夢想だと冷徹に捉えるべき。社人研も、日本の人口は2060年に約8700万人。2110年に約4300万人まで減少、と試算しています。徒に恐れる勿れ。〝日本凄いぞ〟論者が憧憬する日

露戦争時の日本の人口は4700万人前後。「量の維持」から「質の深化」へと歩み出すべきです。

高度経済成長から高度消費社会へと移り変わっていく1980年＝昭和55年。大学生だった僕は生まれて初めての作品『なんとなく、クリスタル』を「文藝賞」に応募し、選考委員の江藤淳、野間宏の両氏から過分な評価を頂戴します。

耳目を集めた442の注釈に続けて、「人口問題審議会『出生力動向に関する特別委員会報告』」と「五十四年度厚生行政年次報告書（五十五年版厚生白書）」からの引用を、巻末に記しました。20代前半だった僕は、旧厚生省が発表した合計特殊出生率と高齢化率の将来予測に衝撃を受け、認識と選択を「量の拡大」から「質の充実」へと改めねば日本は立ち行かなくなると感じたのです。

35年後の現在、1980年段階では9・1％だった65歳以上の老年人口比率＝高齢化率は26・7％に達し、同じく1・75だった合計特殊出生率が1・42となった超少子・超高齢社会ニッポンを踏まえると、往時の予測数値とて随分と楽観的でした。

にも拘らず昨年6月24日、以下の内容が閣議決定されます。「人々の意識が大きく変わり、2020年を目途にトレンドを変えていくことで、50年後にも1億人程度の安定的な人口構造を保持することができる」と。「～デフレから好循環拡大へ～」と副題を冠した「骨太方針 経済財政運営と改革の基本方針2014」の一文です。

「2040年に896もの市区町村が消滅」する「極点社会」到来は不可避との〝ショック・ドクトリン〟を掲げる一方、1980年段階よりも高い1・8の「希望出生率」こそ「トレンド」であるかの如く喧伝する「日本創成会議」の心智と、奇しくも平仄を整えています。現に内閣の日本経済再生本部HPには、同会議の提言と同じ文言を羅列した「ストップ少子化・地方元気戦略」が9頁に亘って掲載されているのですから。

増田氏は昨年の講演で、「消滅可能性自治体」が87・5％に上る青森県に於いても、「米軍も利用している三沢飛行場がある三沢市、原発施設がある六ヶ所村」は「所得の高い、若い人たちの雇用の場が確保され」、「消滅可能性都市を免れている」と述べ、「若い彼らの希望をきちんと国が叶えてあげれば、間違いなく出生率は1・8までにはなる」と高言しました。

僅か0・6％の国土面積に73・8％の米軍施設が集中する沖縄県や、計10基の原子力発電所が林立する原発銀座の福井県にこそ、「新三本の矢」に相応しき「希望出生率」の「的」が存在する、との〝お花畑〟な三段論法。空理空論を披瀝する前に、「男女計の正規雇用の労働者の年収を100とした場合、非正規雇用の労働者は5割前後の年収水準となっている」と明記した「平成25年版厚生労働白書」を拳々服膺されるべきでしょう。

とまれ、嘗ては日没時を「誰そ彼」、日出時は「彼は誰」と呼びました。何れの時間帯も、その先に立っているのが誰なのか、五感を駆使して手探りで見極めねばならぬ時間帯。而してある時期までは暮れ方も明け方も「彼は誰」と呼んでいたのです。謂わばロールシャッハ・テストの騙し絵と同じ寸法。

それは、昨年末に上梓した『33年後のなんとなく、クリスタル』の主題でもあります。必ずしも経済は順調でないのに、何故か暮らし向きに憧れてしまうフランスやイタリアは、日本の半分の人口6千万人台。他方で、勃興するヴェトナムとて実は合計特殊出生率は1・7台。タイは日本と同じ1・4台。富国強兵ならぬ富国裕民、私益資本主義ならぬ公益資本主義。人が人のお世話をして初めて成り立つ福祉・医療・教育・環境等の領域で、欧州のみならずアジアも直面する超少子・超高齢社会に於ける21世紀の新しい雛形を創出してこそ、オンリーワン・ファーストワンのモノ作りで地歩を築いてきたニッポンの面目躍如。「黄昏」に思える日本こそ最も「暁光」に近いのに、「希望出生率」なる「量の維持」を掲げる嗚呼、哀しさよ。

田中康夫「ささやかだけど、たしかなこと。」は毎月最終週に連載します。

たなか・やすお……1956年生まれ。作家。2000年から2006年まで長野県知事を務める。
近著に『33年後のなんとなく、クリスタル』など。
田中康夫ダイレクトメール→tanaka@nippon-dream.com　URL→http://www.nippon-dream.com/